

Tales of Twilight～黄昏が真実を告げるRPG～

乙姫 凧紗

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

十年前。とある場所で二年続いた戦争があった。

それは、“ある生物”と人間の死闘であった。

戦いが終結した後、“英雄”は忽然と姿を消した。

その行方は要として知れぬまま月日は流れ、世界は平穏な時を刻み続けていた。

神殿に仕える騎士団の問題児と、お節介焼き。凸凹な二人がある任務を受けて旅立ったことで物語は回りだす。

Tales of Twilight

——黄昏が真実を告げるRPG——

この物語は、作者が「こんなテイイズがあつたらいいのに」という妄想の下に作り上げた自己満足作品です。

バンナム様他各社とは一切関係ございません。なにとぞご了承くださいませ。

気に入っていただけましたら感想等いただけますと、作者の原動力にもなります。

また、誤字脱字等ありましたらそつと教えてくださいませ。即刻修正に参ります。

目次

プロローグ	1
問題児とお節介	3
銃士	7
魔喝モノ？	12
西へ	18
迷いの森	23

## プロローグ

その日は昼間だというのに重い雲が立ち込めていた。——否、雲かと思うほどに黒く、大きく、そして重量感を持ったそれは、山よりも巨大な……鳥だった。

魔喝（まかつ）モノと呼ばれる巨大生物を前に、鳥合の衆と成り果てた兵団をちらりと見た赤毛の僧兵は盛大に肩を竦めてため息を吐いた。

その僧兵に背を預けていたもう一人の赤毛はどうやら騎士のようで、鈍く光を照り返す剣を掲げて兵たちを鼓舞していた。

「臆するな！ 相手は手負いだ、このまま畳み掛けるぞ！」

しかし、手負いの獣ほど追いつめられると何をしでかすかがわからない。

それも騎士の男は理解していたようで細やかな指示を飛ばしながらも最低限の負傷で済むようにと尽力していた。

「  
男が傍らの僧兵に何やら耳打ちするが、僧兵は聞き入れずに緩く首を横に振る。

「そう言うな。皆で生きて帰るためだ」

「……ハイそうですかわかりましたって言うこと聞くような素直な子じゃないってことはよおくご存じのはずだけど」

次にため息を吐いたのは騎士のほうだった。

僧兵が言っただけ聞くような従順な人物であつたならば彼もここまで気を病むことはなかったろう。

それほどこの僧兵は扱いにくい人物なのだ。

「トルイドオオカラス……予想以上に手強いな」

ひっそりと呟く男に、僧兵は派手な装飾のピアスを弾いて口角を釣り上げた。

その足元にはいつの間にか描いたのか、赤く輝く幾何学模様のような魔方陣が複雑に絡み合っていた。

それは、『エマナ術の申し子』と呼ばれる僧兵が独学で編み出した才

リジナルの魔方陣であり、本人が試行錯誤していたが未だに成功した試しがないと口にしていたものだった。

「お前、それって……」

「ええ、未完成。ぶつつけ本番っていうのも悪くないでしょ？」

相変わらず、この天才の成長幅は留まることを知らないようだ。

絡まったままの線が噛み合い、解け、一つの形を成していく。芸術作品のような動きをする力の流れは、すべてが中央の僧兵と男に集中していた。

「これは……」

「ちよつと力貸してもらおうよ！」

ごう、と風が鳴く。力の本流に呼応して吹きすさぶ風が熱を帯びる。

周囲にある炎のエマナ粒子が二人を取り囲むように円を描いて回る。それは魔方陣の輝きに合わせて激しくなっていく。

——ヤルデハナイカ、人ノ子——

輝きが頂点に達し、魔方陣から炎が吹き上がったその時であった。

二人の脳内に直接声が響いたのだ。揃って顔を見合わせた二人だったが、声の主はほどなくして判明した。

それは、未だ大空を覆い尽くす怪鳥が発していたのだ。

——愚カニモ我ニ挑ム心意気ハ認メヨウ。……ダガ、我ニ牙ヲ剥イタ報イハ受ケテ貰ウゾ、人ノ子ヨ——

「待て…逃げるのか！」

悠然と羽ばたく怪鳥に男の方が声を張り上げるも、その頃には黒い影は遙か上空に飛び去っており、彼の声は届かなかった。

「ラティアアラド……い！」

男—ラティアアラドと呼ばれた方だ—は自分を呼ぶ声に答えようと声を上げたが、二人を包んだ黒い霧によってそれは遮られた。

## 問題児とお節介

日の光を受けて輝くのは色とりどりのステンドグラス。

教会と巡礼者の宿泊施設を兼ねたそこは、冒険者と巡礼者で今日もごった返していた。

神殿にやってきた者がまず目にするのは大聖堂に飾られたステンドグラスである。

神話時代の神々の戦いを描いたというそれは全部で八つに分かれており、それぞれの属性を加護する精霊を模したものになっているらしい。

その一つ、火の精霊であるヴォルケードの肖像の近くに、その人物は立っていた。

すらりと伸びた長身に、切れ長のオッドアイ。そして神殿の紋章が入った僧服。

下ろすと腰までの長さになる赤毛をまとめ上げているのは火属性のエマナ鉱石を束ねたアミュレットである。

「……皆暇人よねえ……」

はあ。とため息を吐いた彼——見た目だけでは判別しにくいのが、確かに性別的には間違った認識ではない——は熱心に祈りを捧げる信徒の傍の長椅子に腰かけた。

昔から彼の定位置はヴォルケードのステンドグラスの前にある長椅子だった。

その習慣は今でも変わっていないらしい。

「やっぱり！またここにいた！」

傍らに放られていた聖書を眺めていた彼に怒号を浴びせたのは、彼より若干年下であろうかという女騎士だった。

彼女の名は、ナリユア・フェリアモータ。神殿を警護する騎士団の発足者の孫であり、騎士団始まって以来初の女性の部隊長補佐官、つまり彼の上司にあたる人物である。

「ああら、誰かと思ったら団長補佐様じゃないの。何か用？」

鬼の形相で詰め寄られたところで、彼にとってはどこ吹く風なのか

ちらりと彼女を見ただけで直ぐに手元の聖書に視線を落とした。

「今日、定例会議があるって言ったよね？」

「言ったわね」

相変わらずの態度に、ナリユアはふるふると拳を震わせて口を開きかけたが、いつものことだと小さく息を吐いて言葉を続けた。

「それにアライストも参加してほしいって言ったよね？」

「ええ、言ったわね。出来ればアライストにも顔を出してほしい  
“って”

それを聞いたのはほんの数日前。日課である聖堂の見回りを済ませたアライスト——オッドアイの彼だ——にナリユアが申し出たことだった。

騎士団の定例会議にアライストも顔を出してはくれないかということだったが、アライストは『気が向いたら』と返答したきりにしていたのだ。

「アタシは『気が向いたら行くわ』ってちゃんと返事はしたと思うんだけど？」

彼が行かなかったということは、そのまま気が向かなかったという意味合いになるのだろう。

しかし、ナリユアはそれでは納得できないようである。

「けど、騎士団の一員であるアライストにも参加する義務は生じるでしょう。」

「それは優秀な補佐官殿がアタシたち末席に情報伝達すれば済むじゃない。そっちの方がよっぽど効率的だと思うけれどね」

ああ。だの、うう。だのと二の句を紡げないナリユアを眺め、アライストは肩を竦めた。

結局のところ、彼相手に議論で打ち勝てる人間などそうは居ないのだ。

例えば丸め込めたとしても、それは彼が “折れてやった” という可能性も出てくる。

今のところ、言葉を武器にした論争で彼と互角に競り合える者はこの教会には居ないらしい。

「もー、アライストは何でいつもそうかなあ……もう少し真面目に生きればいいのに」

「失礼ね、給料分の仕事はしてるわよ。それ以上のことは何も望まないし、得ようとも思わないだけ」

事実、アライストは生活していく分には十分な賃金は得ている。

ただそれ以上を望もうとしないだけだ。

それがナリユアに『怠慢』だと捉えられてしまったのだろうか（本人にとってはたまったものではないだろうが）。

「それで？ わざわざアタシを捜しに来た訳は何よ。まさか、お説教だけしに来たわけじゃないでしょう？」

「つと、そうだった。あのね、アライスト。ヴァスパーニユの北西にあるアヴェルの森って知ってる？」

アライストと同じ椅子に腰かけたナリユアは、言うなり携帯用の地図を長椅子に広げて首都の近くに広がる森を指した。

「ええ、フォトレイトの住民が狩場になっているっていう森でしょ？ それがどうしたのよ？」

「最近、そこで魔喝モノが出るっていう報告が上がっててね。フォトレイトの人たちも手が出せないんだって」

「……魔喝モノ……ね」

アライストは一瞬苦い顔をしたものの、ひとまず話の全貌を把握しようとして地図とナリユアの言葉に集中することで気を紛らわせた。

「でね、ヴァスパーニユの銃士さんが協力してくれることになってるの」

「じゃあアタシたちの出る幕は無いんじゃないの？」

「今あつちも大変みたいなんだ。ほら、偽神官の話はアライストも知ってるでしょ？」

現在ヴァスパーニユで起こっている事件と聞いて話に上がるのは未だ被害が拡大しつづけているという偽神官による詐欺事件だろう。

フェルドナーダ大神殿の神官だと名乗り、信徒から金品を寄付と称して巻きあげるといふ何とも罰当たりな手腕であるが、教会の認定証まで持ち出したというのだから犯人もなかなか用意周到である。

「……引つかかる方も引つかかる方だと思っけどね、アタシは」

「——ま、まあ、ともかく！それでヴァスパーニユも人手不足なの。で、聖堂騎士団にお呼びがかかったってわけ！」

「——で、アタシも行けど。そういう話なのね」

「そういうこと！」

大方、騎士団始まって以来の天才だと持て囃されているアライストの実力に目を付けたヴァスパーニユの重鎮たちが実力を見る為に指名したのでろう。

「この依頼を成功させたら聖堂騎士団の株も上がるし、アライストや私の実力も見てもらえる。とても名誉なことだと思っんだ」

「——アタシは遠まわしにアンタのお守りをしろって言われてる気がするんだけどね」

もともと、聖堂騎士団の評価はそれほど高いものではない。

というのも、聖堂騎士団を結成する面々の多くは傭兵上がりの荒くれ者であり、巡礼者とのトラブルも絶えなかったために首都ヴァスパーニユからは敬遠されていたのだ。

ここ最近はそういった諍いもなく、平和的に解決するようになってナリユアたちが尽力したおかげで事なきを得ているといった状態だった。

「ど・も・か・く!!おじいちゃ……じゃない、騎士団長もこの件には慎重になってるの。アライストを指名したのだって団長なんだよ？」

「あのタヌキジジイ……体よくアタシに押し付けたわね……」

浮足立つナリユアとは対照的な心境にあるアライストは、後日思う様嫌味と働きに見合った報酬とそれ相応の休暇を申請してやろうと密かに心に決めるのだった。

## 銃士

数日後の朝。

アライストの姿は登山道の入り口にあった。

神殿から件の森に向かうには、どういうルートに行くにせよまずはこの険しい山脈を越えなければならぬ。

数多くの巡礼者が訪れるからか、登山道には煉瓦が敷き詰められており、歩道も整備されていた。

「誰がやってんのかしらね、ここの整備。まさか、これも騎士団が管理してるとか?」

「そのまさかです!」

背後からの声に振り向くと、そこには聖堂騎士団の正装に身を包んだナリユアの姿があった。

アライストはというと、そんなナリユアとは対照的に赤い僧服。これは彼の普段着でもあった。

「随分な気合の入れようじゃない。……たかが調査でしょうに」

「たかが調査、されど調査!真面目にやる!」

鼻息荒く言うナリユアにアライストはやれやれと肩を竦める。

旅立ちを祝福しているような快晴。それに色を添えるのは教会から鳴り響く鐘の音。

ナリユアの首から下がっている深い緑のアミュレットが太陽の光を照り返して地面に淡い影を映していた。

「いい天気だねー」

「そうね」

このままピクニックにでも出かけられそうな陽気の中、二人は登山道を真っ直ぐに王都方面へと進む。途中ボアの群れに遭遇したが、アライストがまとめて消し炭にしてしまったので事なきを得ていた。

登山道を抜けると、見渡す限りの草原が広がっていた。

見晴らしが良いまっ平らな大地をピョピョやプチプチが我が物顔で通過していく。

敵意は無いらしいが、目の前でチラチラと影が横切っていくのはさ

すがに背筋のあたりがむず痒くなる。もちろん、鬱陶しいという言葉で。

「さ、もう少しで目的地だよ!」

登山道の出口から見て西寄りにある巨大な都市、それこそが首都ヴァスパーニユである。

東にあるイレド山は代々のヴァスパーニユの統治者（つまるところが国王であるが）が試練を与えられるという伝承が残る山であり、有事の際以外は立ち入りを禁じられている。

ともかく、彼らの目的地はこのヴァスパーニユであった。

「何でこっちがわざわざ迎えに行かなくちゃならないのかしら。依頼人ならこっちに出向くくらいに甲斐性を見せて欲しいわ」

「首都で装備を整えろってことなんじゃないかな？ほら、首都の方が装備の品揃えも豊富そうじゃない」

「準備、ねえ」

確かに装備を整える時間は必要であるし、どのような魔物が巢食っているかもわからない中間雲に突き進んだところで結果は見えていくことだろう。

しかしながら。そういったものは前もって準備をするべきものであるし、王宮に仕える身であるならその重要性は理解しているものではないのだろうか。

アライストの中でその疑問はぐるぐると巡っていた。

「わあ……!」

ヴァスパーニユの城下町は多くの出店と人でごった返していた。

港が併設されていることもあって、他国から入ってきたものもあるのだろう。ナリュアが目を留めたのはエマナ鉱石を使ったアクセサリーの露店だった。

それにチラリと目をやったアライストの顔を見て露店の主人は『おや』と首を傾げた。

目が合った瞬間、アライストはぎょっと目を見開いて顔を逸らしたが時はすでに遅かったらしい。店主は親しげにアライストに声をかけていた。

「あれ、アンタ……ラティアラドさんの」

「行きましよ、ナリユア。向こうを待たせちや悪いでしよ」

その場から逃れるように突如腕を引かれてナリユアは店主とアラリストを交互に見ていたが、彼女が何かを言い出す前にアラリストがナリユアを引っ張って歩き出してしまったため、結局何も聞けないまま城門前まで来ていた。

「確か、待ち合わせはこのあたりのはずなんだけど」

「なあによ、待ち合わせするつてのに特徴も聞かなかったの？相変わらず間抜けね、アンタつて娘は」

本日何度目になるかわからないため息と共に辺りを見回すが、それらしい人物は見当たらない。城門を警備している兵士は何人か見たものの、ナリユアが言う銃士は到着していないようだ。

「私たちと歳は変わらないくらいだつて言つてたけど……うーん、どこかなあ」

「あんたらが教会から来たつっう騎士さん？」

ナリユアの背後からによつきり生えた影は、二人を見るなり遮光性サングラスの奥で瞳を細めた。

その出で立ちには王宮仕えとは思えないほどに軽装の男だった。

背に双剣、腰に双銃を携えていたが、一見しただけでは彼が件の銃士だとは気が付かないだろう。

「俺はフォルヘイム。フォルヘイム・リユー・ヴァインレーベ。アヴェェルの森の調査に同行させてもらうぜ、よろしくな！」

このフォルヘイムという男は見た目通り軽薄な語り口の人物だった。

よく言えばムードメーカーというべきなのだろうが、アラリストからすればただの喧しい男という印象しかなかった。

「へえ、その若さで団長補佐！エリートさんつてこと？」

「ううん、騎士団長がおじいちゃんだからね、その七光りだよ」

「ふうん。それでもその立場に見合うようにつて努力を惜しまないことはいいいことなんじゃないかな？」

他愛もない話でナリユアとの親交を深めていくフォルヘイムだつ

だが、なぜかアライストには関わりを求めてこなかった。

本人はそれで都合が良いのだが、どうにもフォルヘイムの行動には裏があるような気がしてならないのだ。

「フォルヘイムはアライストが苦手？全然話しかけにいかないけど」

さすがのナリユアも気づいたのか、そう問いかけて首を傾ぐ。

「いいや、苦手ってわけじゃないさ。先の大戦の英雄様だからな、緊張してんの」

その視線は真っ直ぐにアライストを射抜いていたが、先頭を歩いていたアライストは気にせずに進みを進める。

「先の大戦って……トルイド戦役のこと？」

「ああ。その大戦でトルイドオオカラスを討伐したのが赤毛の騎士だったって話、聞いたことあるだろ？」

トルイド戦役。それはこの世界に生きる者ならば知らない者はいないものだった。

十年前、突如トルイドの中心部である『トルイド境界線』に魔喝モノが出現した。

世界各地から精銳が派遣され、魔喝モノ『トルイドオオカラス』の討伐隊が結成され、二年に渡り戦が続いた。

その部隊を率いていた人物のことは明言されていないが、大戦から生還した者の話によれば年若い赤毛の騎士であったということらしい。

「それがアライストだっていうの？」

「違うのか？」

「違うわよ。アタシ、その大戦には行っていないもの」

特徴は似ているのだと唸るフォルヘイムには目もくれず、アライストはヴァスパーニユから真っ直ぐ北を目指していた。目的地は依頼があつたフォトレイトの村だ。

「何でアヴェルの森に直行しねーの。その方が手っ取り早く片付くだろう？」

「バカね。魔喝モノの詳細も知らずに突っ込んだら無駄死にするだけでしょうが。仮にも銃士なんだからそれくらい考えなさいな」

ヴァスパーニユを出発してから随分と時間が経っていたようで、  
フォトトレイトに着く頃には日暮れが近くなっていた。

情報収集は翌日に回すことにして、一晩を明かすこととなった。

## 魔喝モノ？

翌朝。三人は村を回ってアヴェルの森に巣食う魔喝モノについての情報を集めていた。

村人全員が口をそろえて言うのは、誰も魔喝モノは見えていないが、夜中になると獣ではない何かの音がするというものだった。

恐らくは森が生息地であるということから、その場所に特化した進化を遂げた魔喝モノであろうと推測される。

だとすれば、有効とされるのはアライストが操る炎の魔術であるが、

「理屈で言えばそうだけど、本当に奴の弱点が炎とは限らないわよ」というアライストの一言で作戦は止む無く練り直しとなった。

「でも、元が樹や草なら炎も多少は効くんじゃないかなあ」

宿の食堂のテーブルに着くなりそう切り出したのはナリユアだ。

「——そうかもしれないけど、アタシが加減を少しでも間違えたら森林火災よ？」

運ばれてきたサラダをつつきながらアライストが言うと、分厚いポークステーキを切り分けていたフォルヘイムは「そういうもんなのか？」と首を傾ぐ。

「アンタやナリユアは術師じゃないからわからないだろうけど、魔喝モノが支配する場所っていうのはエmana粒子の濃度が不安定になりがちなの。そんな中で中途半端な術式組み上げたりなんてしたら……」

「したら？」

「……良くて小規模な爆発、最悪の場合はそこら一帯が吹っ飛ぶわよ」  
鬼気迫るアライストの声に、ソースをたっぷり絡ませたパスタを巻いていたナリユアの手が止まる。

魔喝モノが出現した場所のエmana粒子濃度が不安定になるという記述が文献に残っていることは知っていたのだが、アライストが言うような弊害まで起きるとは予想外だったらしい。

「まるで見てきたように言うんだな」

フォルヘイムがステーキが突き刺さったままのフォークを向けて言うと、

「昔実験したことがあるだけよ」

と肩を竦めて皿に残っていた人参を口の中へ放り込んだ。

ナリユアはといえば、とつくの昔にパスタは消化しており、デザートのババロアをつついているところだった。

「呑気ねえ、アンタって子は……」

「だあってえー！アライストの話難しいんだもーん！」

その後、アライストが掻い摘んで説明したおかげでナリユアもアライストの言わんとすることの三分の一程度は理解できたのだった。

「で、どうするよ？まさか魔喝モノに喧嘩売りに行くわけじゃないだろう？」

村が一望できる広場で農作業に勤しむ村人の姿を眺めながら言うフォルヘイムは、時折森の方を眺めてため息を吐いていた。

「……アタシとしても、それは遠慮したいところではあるわね」

「え、じゃあ調査どうすんの？」

きよとんとしたナリユアに、アライストはまた眉間に皺を増やす。

彼女の言動に頭を痛めたわけではなく、とりあえず形だけでも調査をしなければならぬという面倒事を思い出したからだ。

「あー……やっぱ行かなきゃダメっばいぜ」

「……どうやらそうみたいね」

顔を見合わせたフォルヘイムとアライストは揃って渋面になったが、ナリユアだけは森の方を真っ直ぐに見つめて決意を固めていた。

「それで？いつ行くの？私は今からでもいいよ！」

時刻は昼を少し回った頃。森に赴くには問題のない天候であるが、如何せん二人の男は乗り気ではなかった。

「……とりあえず、行つとくか？」

「………そうね」

半ば押し切られた形ではあるが、三人はアヴェルの森へと出立することとなった。

無論、万全の態勢を整えた上で、である。

アヴェルの森は、自然が保たれており動植物も生態系を壊さない程度に保護されている豊かな森だ。ただ、その分見通しが悪く、魔物の不意打ちに遭いやすいという不便さはあるのだが。

「熊とか出そうだよね」

「俺らが退治すんのは熊じゃなくて魔喝モノだけだな」

村の住人が狩場に行っているだけあつて魔物の数は少ないが、それでも魔喝モノが潜んでいる可能性があるため三人は慎重に歩を進めていた。

「……おかしいわね」

数十分森を歩き回った辺りでアライストがふと呟く。

「おかしいって、何が？」

休憩と称して大きな木の根元に腰を降ろしていたナリユアとフォルヘイムが怪訝な顔をしているアライストを見上げるが、彼はそれにはお構いなしでウロウロと落ち着かない様子でその場を歩き来していた。

「エマナ濃度の乱れが全くと言って良いほど無いのよ。……魔喝モノが居るっていうなら多少は配合が変わったりもするんだけど……」

懐から懐中時計のような機材を取り出して辺りに翳し、その変化を見るなりアライストは眉を寄せた。

その文字盤にあたる部分は赤のグラデーションから全く変化がない。この近辺のエマナ濃度が安定している証拠だ。

「へえ。……そりゃあ確かに妙な話だな」

サングラスで見えないが、フォルヘイムも神妙な顔をしてその場から腰を上げる。

それに釣られるようにナリユアも立ち上がって辺りを警戒しだした。

「え、つてことは、魔喝モノ居ないの？」

「……そう願いたいものだけどね」

何度辺りを見回してもそこに広がるのは鬱蒼と生い茂る木々とそこに住まう動物たちのみで、至って平和な森でしかない。

しかし、村人はここに魔喝モノが居るといふ。

アライストは妙な違和感を感じ始めていた。

村に着いたアライストらを歓迎するでも追い払うでもなく、旅人として迎え入れた村人の反応といい、魔喝モノが目と鼻の先に存在するかもしれないというのに平然と日常生活を勤しむ姿もどこかおかしい。

「……何もなければそれに越したことはないわ。もう帰ってもいいでしょう?」

「へ?」

はあ。とアライストが息を吐くのとナリユアがポカンとして彼を見るのと、その背後で轟音が鳴り響いたのはほぼ同時だった。

「な、何?!」

「こ、こりゃあ……たまげた」

「……随分と、上手く擬態したもんだわね」

振り返った三人は揃って『それ』を見上げて顔を引き攣らせた。

つい先ほどまでナリユアたちが背を預けていた大木が突如その根を動かして彼らに向かってきていたのだ。

「え。ええええ!!」

「ちよつと、どういうことだよ、これ!」

「アタシが聞きたいわよ!」

三者三様の反応を示しながらも、三人は臨戦態勢を取っていた。

術師のアライストを庇うようにフォルヘイムとナリユアが前に出る布陣で迎え撃つも、そのあまりの巨大さに圧倒され決定打となる一撃を見舞えずにいる。

「アライスト!これ、魔喝モノじゃないんでしょ?!魔術でパパッとやっつけてよ!」

「簡単に言ってくれるわねつと!!」

杖を鞭のようにしならせて地面に叩きつける寸前で飛び退きながら隙を窺うが、息をつかせぬ攻撃にそれすらもままならない。

「魔人剣!」

ナリユアが放った剣圧は数本の杖をそぎ落としたが、魔物の猛攻は止まらない。

それどころか激昂した魔物はさらに枝を薙ぎ払うようにして多段攻撃を仕掛ける始末だ。

「ちよつと?!ナリユア!あんまりそいつを刺激しないで頂戴!」

「そんなこと言われたってえええええ」

まるでイノシシのようだ。とアライストは思っていた。

退く素振りは見せず、ただ前へと押し進む。猪突猛進とは正にこのことだろう。

「どれくらい時間稼げば何とかかなりそうだ?」

木から木へ飛び移りながらフォルヘイムが問うと、縄跳びのように薙ぎ払いを避けていたアライストは暫くの間を置いて

「何とかって、どの程度?」

と問いを返す。

「そうだな、こいつを大人しくさせる程度……かね。出来れば森林火災にならないように頼みたいんだが?」

「つたく、注文が多いっいたらないわね!最低五分!それだけ稼いでくれれば十分よ!」

「任せろ。ナリユア!行くぞ!」

「え。あ、う、うん!!」

トン、と地を蹴ったフォルヘイムとナリユアがそれぞれ回り込むようにして反対方向に走り出すのと同時にアライストは赤いエマナ鋏石の欠片を地面に放る。

そこからエマナ粒子を抽出し、幾重にも円を重ねて魔方陣を描いていくのだ。

エマナ術師は魔方陣を描く間は無防備になる。それ故に単独で戦うことは少ない。

「水牙双連!」

双剣を振るうフォルヘイムの刃は水のエマナ粒子でコーティングされているようで、実際の刃渡りよりも可動域が増している。それをブーメランのように振りぬくと、増やした分の刃が魔物の枝を纏めて刈り取る。

「風追牙!」

それに追い打ちをかけるのはナリユアの放つ剣圧の刃だ。鎌鼬のように鋭く研ぎ澄まされた剣圧は魔物の眼を射抜いた。

声なき絶叫を体现するように身をくねらせる魔物はその場で地団太を踏む。

「ナイス、ナリユア！おい、アライスト！まだか！」

「……良いわ！二人とも退きなさい！」

幾何学模様が浮かぶ赤い円の中心で、アライストが叫ぶと同時に二人は逆方向に飛び退く。

目の前には縦横無尽に枝を振り回す魔物。遮蔽物は魔物自らがなぎ倒しているためほとんどない。

「炎よ、我を守護する意志よ、輪を描け、鎖と成せ、我、汝の開放を望むもの！『ヴォルカニック・チエーン』!!」

アミュレットを弾いたその瞬間、魔法陣の中心、つまりアライストが立っている場所から、燃え盛る鎖が伸びて魔物を雁字搦めにする。

こうなってはさすがの魔物も手も足も出ないようで、根のような足をばたつかせる他に抵抗する術は無かった。

「今よ！」

「おう」

「わかった！」

ぐ。と鎖を引き込み、魔物が倒れ伏したところへフオルヘイムが刃を突き立て、ナリユアがそれを切り刻む。

かくして、巨大な樹木の魔物は僅かな焦げ跡を残して絶命したのだった。

西へ

「どういふことよー」

巨大トレントを討伐して戻ったアライストは、村長の家に押し入るなり開口一番で怒号を発した。

「どういふこと、とは……」

「えつとですね、結論から言うと、魔喝モノは居ませんでした」

「代わりにトレントのデツカい奴が居ただけだったぜ」

その残骸を引き摺ってきたフォルヘイムが肩を回しながら言うと、村長は「そうですか」と一言返すのみであった。

「で？何でアレが『魔喝モノ』だと思ったわけ？」

幾分か怒りが収束したらしいアライストの問いに、村長はおずおずと事の顛末を語りだした。

「いや、教会の使いの方がすな、『アヴェルの森に魔喝モノが出現したので封鎖する。魔喝モノが感づいてはいけないので、通常通りの生活を送るように』と通達をしていきましたのでな」

以来、彼らはアライストラが訪れるまでアヴェルの森には立ち入らなかつたのだという。

「ねえナリユア。アタシ何だか嫌な予感がするんだけど」

「アライストも？実は私もなんだよね」

二人の脳裏を掠めたのは、王都でも度々話題に上がった「あの事件」の事だった。

「あの、村長さん。これ、なんですけど」

「ああ、この人ですよ。その神官様は！」

そろりと前に進み出たナリユアは懐から一枚の手配書を取り出した。

そこには件の「偽神官」と思われる人物の人相書きがあつたのだが、それを見た途端に村長は顔色を変え、ナリユアとアライストはガクリと脱力した。

「やっぱり」

「偽神官はこんなところにも立ち寄ってたんだね！」

片や憤慨し、片やため息を吐くという両極端な反応に村長も戸惑っていたようだったが、二人がフェルドナーダ大神殿に仕える正規の神官であり、先に村を訪ねた神官は今世間を騒がせている偽神官なのだと告げると「そうでしたか」と神妙な顔になった。

「それで、奴さん次はどこに行くかは言ってなかったのか？」

「確か、神官様はテイランドに向かうと言っておられたような……」

それを聞くや否や、フォルヘイムは荷物から筒状の紙を取り出して机に広げだした。

机の半量以上を占領した紙——それは世界地図だった——は数年ほど古いものようだったが、現在と地形もあまり変わっていないため、それでも十分に道のりを確かめるには足りる。

ナリユアとアライストが机の周りに着いたのを見届けたフォルヘイムはフォトレイトから西にある大陸を指した。

「ここがテイランド。一応こっちは同盟国だが、俺たちがあつちに渡ったところで良い顔はされねえだろうな」

テイランドとヴァスパーニユは書面上は同盟国の盟約を結んでいるが、お互いに緊迫した状況であり、渡航の便も数えるほどしか運航されていないのが現状だ。

そんな土地に単身乗り込むともなればあちらも警戒してくるに違いない。

フォルヘイムはそう見ていたのだ。

「でも、偽神官を捕まえなきゃ、もつとんでもないことになるかもしれないんだよ？ だったら行かなきゃー！」

その前提をもろともせずただ前を見ているナリユアには迷いなどなかった。

ただ一人、アライストはこの間も黙ったままテイランド周辺の地図を睨んでいた。

「アライスト？」

「どうした？」

「……もしかしたら、だけど。協力してくれるかもしれないヒトに心当たりがあるわ」

漸く発した言葉はナリユアらにとっては渡りに船とも取れるものだった。

「え。誰なの？誰なの？」

「おま、そういうことは早めに言えって！で、誰なんだ？」

矢継ぎ早に放たれたのはどちらも似たようなもので、アライストはこの三人で行動するようになってから何度目かわからないため息を吐いた。

「ダーロア・レイヴァフォルオ。ヤーマイルの森に住んでる偏屈ジジイよ」

ヤーマイルの森とは、ティランドへ向かう運河を覆うように群生する密林の総称であり、ある種ティランドへの抜け道とも言える場所である。

ただし、魔物も数多く生息しているため近づく人間など居ないのだが。

「そんな場所に住んでるお爺さんかあ……どんな人なんだろ」

「筋骨隆々なスゲー爺さんだぜ、きつとな」

好き勝手な妄想を繰り広げる二人を尻目に、アライストは浮かない顔で暮れはじめた空を眺めるのだった。

翌日の昼、アライストとナリユアの姿はヴァスパーニユからほど近いゲーヴェル港にあった。

というのも、そのまま村に一泊した彼らの下にヴァスパーニユから使者が訪れ、偽神官追跡の命が下されたのだ。

恐らくは事前にフォルヘイムが報せを寄越していたこともあったが、国王付きの銃士とはいえ、フォルヘイムは末席であるため国外へ出る許可も下りたのだろう。

そのフォルヘイムと言えば、船の手配をするために席を外していた。

「アライストさ、もとはティランドの出身なんでしょ？前にそう言っていたの思い出したよ」

「……そんなことも、言ったかしらね」

その話をしたのは入団直後の頃だっただろうか。とアライストは

ぼんやりと思い返していた。

その思考を遮ったのは例のごとくフォルヘイムの声だった。

「よう、お二人さん。無事船が手配出来たぜ。行先はシエアナブラ港だぞうだ」

「シエアナブラって、あの学業都市シエアナブラのこと？」

シエアナブラ。その地名はあまりにも有名だ。エマナ術学の第一人者である教授が数多く在籍し、その後継者を育成する機関が備わっている土地である。

現在のエマナ魔術の基礎はそこで確立されたと言っても過言ではないとの見方も出るほど、その技術は目を見張るものがあるのだ。

「そう。で、出発はいつなの？」

「一時間後だとき。お互い準備もあるだろうし、一時間後にここってことでどうだ？」

「ええ、良いわよ」

各自準備を整えるべく、三人は方々へ散って行った。

一人海岸沿いを歩いていったアライストはヴァスパーニユの旗を掲げる客船を見上げていた。正確に言えば、その客船の上に広がる空であるが。

「……………ティランド、久しぶりね。あの日以来だわ……………」

両目を細めて言うその声は、普段の彼とは雲泥の差であった。

日の光に照らされて地面に淡い色を映すアミュレットの影は頼りなさげに揺れていて、それは彼の心境を表しているようだった。

「……………もしかしたら、向こうで会えるかも……………しれないわね」

ひっそりと呟いた言葉は波の音に混ざってしまい、その場に居た人間は聞くことはなかった。

時間ピツタリに揃った面々は各自準備を整えたようだった。

ナリユアは消耗アイテムを補充し、フォルヘイムは当面の必要経費として幾何かのガルドを実家からせしめてきたらしかった。

アライストは散歩がてらエマナ粒子を携帯用の装置に満たしていたようだ。

「ねえ、アライスト。それ何に使うの？」

装置を目ざとく発見したナリユアが問うと、アライストはチラリとそれに視線をやった後に

「これはもしもの時のためにね。慣れ親しんだエマナ粒子の方が扱いやすい時もあるのよ」

とだけ答えた。

エマナ術師の間では最早常識となつている『エマナ粒子』の扱いであるが、術者ではないナリユアやフォルヘイムには馴染みのないものなのだろう。二人とも顔を見合わせて首を傾げている。

そんなやり取りをしている間に、出向の準備が整つたらしく、船が豪快に汽笛を上げた。

「よおし！今度こそ偽神官を捕まえてやるんだから！」

「その前にはしやぎすぎて海に落ちないで頂戴ね、流石のアタシもそこまでフォローしてあげられないわよ」

「ははっ、やっぱりあんたらと一緒だと退屈しなさそうだけ」

かくして、彼らは次なる目的地に向かって港を後にしたのだった。

## 迷いの森

船が港に着いたのは、ゲーヴェル港を出発して三日後のことだった。

船旅は三人が思い描いていたよりも快適なもので、至れり尽くせりとまではいかないものの、それに近いもてなしを受けることができたのだ。

フォルヘイムがヴァスパーニユの銃士だからその扱いなのではという疑問は捨てきれなかったが、劣悪な環境に三日間置かれるよりはそれは一先ず頭の片隅に追いやっておくべきなのだとアライストは判断したらしい。

「あー、久しぶりの陸だあー！」

船から降りるなり大きく伸びをしたのはナリユアだった。

彼女にとつて船旅は初めての経験だったようで、アライストが案じていた通りに手すりを乗り越えて海に落ちかけたり、食事を食べすぎて動けなくなったりと様々なトラブルを持ち込んでいた。（もちろん、それを処理するのはアライストの仕事だったわけだが）

それでも放り出されなかったのは最早奇跡としか言いようがなかったが、ここまで五体満足で送り届けてもらえただけでも良しとするべきだろう。

「さて、ヤーマイルの森まで結構あるな。ここらで装備も整えとくか」

船員と何やら話をしていたフォルヘイムも合流し、一行はシエアナブラ港をぐるりと見て回ることにしたらしい。その過程で何か新しい装備品が手に入れば一石二鳥といったところだろう。

「流石にエマナ鉱石関連のものが多いな」

「ここはそういう街ですもの。掘り出し物が見つかることも稀にあるそうよ」

港に所狭しと並ぶ露店の前を通り過ぎながらフォルヘイムがぼやいた言葉にも、アライストはしっかりと受け答えをしていた。

はて？と首を傾げたナリユアがアライストがテイランドの出身だから詳しいのだ、という結論に至るにはそう時間は要しなかったが、

彼女がそれに気づいた時には彼らの話題は別の所へと向かっていた。「それで？ヤーマイルの森に住んでる偏屈爺さんってのは、あんたの知り合いなのか？」

「……まあね。昔世話になったってだけの間柄よ。特に親しくは無いわ」

どんな経緯で世話になったのか。特に親しくもないのなら何故名前を出したのか。またいつもの気まぐれなのか。彼の真意の程は判りかねるが、今はそれしか頼りにできる情報がないのだから仕方があるまい。

「まだくたばってないといいけどね」

軽快な足取りで向かうのは、学術都市シェアナブラの方角だった。

なにがあるのか。と二人もその後が続く。

「ねえ、アライスト。あれ、何？」

ナリユアが指したのは広場の中央に位置する妙な形の建物だった。時折天辺のダイヤルが回転し、何かが放出されているのは見て取れたが、それが何を成しているのかという点においては皆目見当もつかないのだ。

「あれは人工的に作り出したエmana粒子を放出している装置よ。ダイヤルはエmanaの属性をあらわしているの。今なら……そうね、赤いから火のエmana粒子だわ」

アライスト曰く、放出されているエmana粒子は純正の物に比べると成分的にも劣る部分があるものの、研究資料として使う分には問題ないのだという。

よく見れば、ゲーヴェル港でアライストが使っていたものと同じ装置を持った研究員らしき人物らがそれにエmana粒子を満たしていた。「エmana粒子といえば、未だに人口抽出できないもののまだあるんだろ？」

「ええ。光と闇のエmana粒子ね。学術的には存在すると言われているけれど、実際に粒子として再現できた人間は未だ存在しないわ」

「そういえば、エmanaの属性対比の理論を発表したのもシェアナブラの人だったよね」

「あら、ナリユア。アンタよく知ってたわね」

街を通り抜け、『学術都市 シェアナブラ正門』と書かれた門扉を越える頃には一行の話題はすっかりエマナ粒子関連のものになった。

エマナには大きく分けて八つの属性がある。火・水・地・風・雷・氷・光・闇である。

それぞれには相反する属性があり、たとえば火のエマナ術師は水のエマナ術を使うことはできないといった制約がつくのだ。これを発見し、世に出したのもシェアナブラの研究者だというのも有名な話だ。

「そうね、わかりやすく実験しましょうか。……これは水のエマナ鉱石。これをアタシが発動させようとしても……」

街の外に出るなり、アライストは道具袋の中から深い青の結晶を取り出して大気中のエマナに呼びかけ始める。最初こそ淡い光を放っていたそれだったが、やがて光は弾けて消えてしまった。

「え？え？今何が起ったの??」

「なるほど、これが反発現象ってやつか……」

何が起こったのか理解できていないナリユアと、感慨深げに頷くフォルヘイムとを見比べて軽く肩を竦めたと思うと、アライストは結晶を袋に戻して何でもないように歩き出した。

「火のエマナ術師のアタシは水のエマナ術は使えない。そういう風になってるってこと」

それを逆手に取って反発する属性同士の術をぶつければ、ちよつとした爆弾のような効果も得られるのだと付け足して、行き先を示す看板に目を通す。

『この先 ヤーマイルの森。用のない者は立ち入るべからず』といかにもな文面の先には鬱蒼と生い茂る巨大な森があった。

「あれが、ヤーマイルの森……?」

「思った以上の規模だぜ、ありゃあ……」

通称『迷いの森』と呼ばれているそこは、正しい道を知らない者が不用意に立ち入ると一生彷徨うことになるという伝承があるくらい

に膨大な数の分かれ道が複雑に絡み合った自然が作り出した迷路である。

「さてと、行くわよ。あまり気乗りはしないけど」

尻込みする二人を一瞥すると、アライストは涼しい顔をして森の中へと踏み入った。

「ちよつと！置いていかないでよおおお！」

「待てって！俺が最後かよ!!」

慌てて後を追った二人を出迎えたのは、小ぢんまりとしたログハウスのような作りの一軒家と、腰が曲がった温和そうな老人であった。

拍子抜けする二人に、アライストと老人は揃って笑う。

「なあに、その間抜け面」

「無理もなからうなあ、二人ともあの樽を鵜呑みにしとるんじやろう」

まるで見てきたかのように言う老人は立ち話も何だから、と三人を自宅と思われる一軒家に招き入れた。

内部は温かみのある木造で、ところどころに民芸品らしき織物や獣のはく製が飾られている。特に暖炉の周りにやたら置物が目立つ以外はごく普通の家でしかない。

「も、もしかして……あなたがダーロアさん？」

人数分のカップに飲み物を入れて暖炉の前にやって来た老人にナリユアが恐る恐る尋ねると、老人は笑みをそのままに頷いて見せた。

「優しそうな爺さんだと思っただでしょ。実はこのジジイ、元テイランドの鬼教官だったのよ」

「へ?!」

思わず二度見したナリユアだったが、老人―彼こそが件のダーロアだったのだが―はアライストを窘めるでもなく、ただ温和な笑みを浮かべているだけであった。

「昔の話じゃよ、お嬢さん」

懐かしむような声音ではあったが、それは飲み物と一緒に嚙下してしまつたらしい。

「それで、アライスト。お前さんが訪ねてくるなんて珍しいじゃないかい。どうかしたのかのう？」

事のあらましを説明し終えたアライストらにダーロアは感慨深げに頷いて

「そのような輩はこの森には来ておらんよ。ここに入ったなら、ワシか孫が見ておるはずじゃからのう」

「孫？」

聞いていないぞ。とばかりに目を瞬いたアライストの元へやって来たのは、まだ十代であろう少女だった。

「これがワシの孫じゃ。シュヴェリアという」

キャスケット帽に淡い金髪を押し込んでいる年端もいかない少女は、ダーロアが得意としていた武器をそのまま受け継いだらしい。背中の矢筒と弓には見覚えがあった。

多少削られてはいるものの、アライストの記憶にあるものと相違ない。

「で、腕は確かなの？」

「多少不安は残るがの、お前よりは使えるじやろうて」

ダーロア曰く、彼女は森の中しか知らない。それ故に井の中の蛙に大海を見せてこいということらしい。

「何よ、アタシたちの目的はついでついでで孫を鍛えてやって欲しいのじゃ。」

「いいや、お前らの目的のついでに孫を鍛えてやって欲しいのじゃ。それなら構わんだろう？」

つくづく人を使うのが上手い。アライストはこの口だけは達者な老人を睨んで声なき抗議を試みるが、老人は見向きもしない。文字通り痛くも痒くもないのだろう。

「バカにしないでよね！わたしだって、やる時はやるんだから！」

この一言がお決め手になったらしい。一行にシュヴェリアが同行することが決まったところで、その日はログハウスで一夜を明かすこととなった。

翌朝。出立の準備を整えたアライストらは森の奥深くへと向かう道の入り口に立っていた。道案内兼同行者となったシュヴェリアの案内で森を抜けて首都テイランドへ向かう手筈は前日に話してある。「では、シュヴェリア。その眼で広い世界を見ておいで」

「はい、おじいちゃん。行ってきますー！」

騎士団長がナリユアを送り出す際にもこういったやり取りが行われていたような気がする。やはり祖父と孫というのはこういうものなのだろうか。

生憎祖父母と過ごした日々が浅いアライストには理解できなかったが、ナリユアはどこか懐かしむような眼差しでそれを眺めていた。「森の抜け方は複雑だつて聞いたけどさ、実際どうなんだ？」

「パターンさえ覚えちゃえば簡単だよ」

シュヴェリア曰く、この森の抜け方にはいくつかのルートがあるとのこと、それさえ把握すれば迷うことなく外へと出られるのだという。

「急ぎたいなら最短距離で行くけどどうする？」

「なるべく早くテイランドに着きたいの。一番の近道でお願い！」

ナリユアの剣幕はアライストでさえ引いてしまう程であったが、シュヴェリアは暫しの間を置いて

「わ、わかった……」

と何とか返答を絞り出していた。

さすがあのダーロアの孫である。肝っ玉の強さだけはきっちり祖父から受け継いできたようだ。

「険しい道になるかもしれないから、それだけ覚悟しといて」

キャスケット帽を被り直した彼女の顔は『少女』から『森の守り人』に変わっていた。

シュヴェリアを先頭に一行は森の中を進んでいく。

最短距離とはいえ、入り組んだ森の中を進んでいくのは困難を極めた。

大半が整備されていないけもの道ということもあり、三人の疲労も蓄積されていく。

「あんまり長く進むと疲れちゃうか……今日はこの辺で休もう！」

道のりの半分程まで進んだところで、シュヴェリアは数メートル先の小さな小屋を指す。

そこは森に迷い込んだ人間が休めるようにとダーロアが各地点に

設置しているもののひとつなのだとシユヴェリアが道すがら説明した。

室内は簡易的な宿泊施設のような設備を整えてあり、一泊するには十分なほどの広さも確保されていた。

「やっぱり、ダーロアさんってすごいねえ……」

「あのまま野宿かと思ったぜ……」

「こんなところで野宿なんかしたら、獣とか魔物に食べられちゃうに決まってるじゃない」

その危険性を回避するために設置しているのだとシユヴェリアは語る。

暖炉に薪をくべる手つきも慣れたものだ。ダーロアの教育の賜物なのだろう。

「ねえ、テイランドってどんなところなの？」

雑談の一環としてナリユアが問うたのはこれから向かう目的地の事だった。

「シエアナブラが学術の街なら、テイランドは武術の街ってところかしらね」

曰く、テイランドには街の象徴ともいえる闘技場があり、武芸に秀でた者たちが一挙に集いその技を競い合うのだという。

「へえ……腕試しにはいいかもね！」

「生半可な覚悟で挑むと痛い目に遭うかもよ」

それほどの手練れ揃いなのだとシユヴェリアは言う。

その中でも最も強いとされているのは、現国王であるロイシユ・オーウアンという名の大男らしい。

「……ロイシユ・オーウアン……。あの脳筋が国王ねえ……世も末だわ」

「そうでもないよ、現に国王は上手くやつてる。ヴァスパーニユと戦争になってないのが良い証拠だよ。そうでしょ？」

首を傾げたシユヴェリアに、アライストはただ肩を竦めるだけだった。

それは肯定とも否定とも取れるリアクションだったが、それはナ

リユアらの疑問を一つ増やす結果になった。

「……私、アライストのことそんなに知らないんだなあ……」

「何よ、急に」

翌日、小屋を出立したナリユアの第一声はそれだった。

怪訝としたのはアライストである。前置きも無しにそんなことを言われては反応に困るといふものであろうが、彼女が突拍子もなく何かを言い出すのは今に始まったことではあいたため、アライストの答え方も素っ気ない。

「それを知って、ナリユアにメリットある？無いでしょ？」

「う……で、でも、仲間の事は知りたいって思わない？」

尚も食い下がるナリユアだったが、アライストが返答をする前に歩き出してしまったためナリユアがそれ以上彼に声を掛けることは無かった。

森を抜けたのはそれから数刻後の事であった。